



学会教育事業のニーズとシーズ

小山 亮平*

上司の定年退職に伴い、私は2006年にエレクトロニクス実装学会の教育事業委員を、半ば強制的に引き継ぎすることになりました。社会人になってからエレクトロニクス領域の仕事に長く携わってきたものの、お恥ずかしいことに学会活動は大学時代以来30年ぶりでした。

この4年間、教育事業委員として初めてのことで、先輩委員の方々にご指導いただき今に至っております。

私が委員をお受けすることになった頃から世界の中でJISSO領域のビジネスとして日本の地位にかけりが出始め、セミナーの企画などを通して本当にJISSOはどこに向かって行くのか？と気がかりになってきました。教育事業委員会は最新の技術情報を提供するセミナーと、若手・新人の教育の場としての教育講座の2本立てで活動してまいりました。しかしセミナーも徐々に小さい会場での開催にシフトし、教育講座は参加人数の低下と学会員、賛助会員企業以外からの参加が目立つようになってきました。

そうした中で委員長を拜命することになり、教育講座を見直し、新企画を立てるというミッションをいただきました。現在、諸先輩委員の方々の協力を得て、教育講座をどうしてゆくかについて、検討を進めている状況です。こうした場を与えられて初めて、私自身学会活動とはどうあるべきかと考えるようになり、これから述べる2点が私にとっての考え方の基本ではないかと考えるに至りました。

まず初めは当学会がやるべき教育講座とは、当然学会を構成する大学、企業、研究機関の皆さんが必要としている教育内容であることが必須であると思います。この点は非常に難しい問題と認識しています。なぜなら、学会構成員がこれからJISSO領域をどう活性化し産業を振興しようとしているか、つまり上記の当該産業領域がどこを目指して明るい未来を切り開こうとしているか次第です。つまり当該産業界全体がまさに悩んでいることとほぼ同じであるからです。この点については今の時点で定まった解答があるはずもなく、むしろ流動している学会のニーズにフレキシブルに対応することが必要と考え、ともかく試してみても良ければすぐやめるとのつもりであります。

もう1点は、当学会でしかできない教育でなければ教育としての付加価値が少ないことになる、ということです。当学会はその歴史の中で諸先輩方々のJISSO領域における知恵、技術、知見を蓄積してきました。その蓄積こそエレクトロニクス実装学会の強みであり、この部分をいかに活かすか、いかに活かした教育にするかがポイントであると思います。つまり学会員、特に長く学会活動を続けてこられた方それぞれの強みを生かした教育を企画することを考えています。

今ようやくこの考えに至った状態でまだ混沌としており、具体的行動はこれからです。教育事業委員だけでなく、学会員の皆様におかれましても是非この点にご理解をいただき、教育事業委員会の活動に協力をしてくださるようお願いする次第です。